

陣営のおいとま

J—2

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ただただ、指揮官がいろんな陣営に顔を出し

ご飯を食べて、スポーツをして、楽しく過ごすだけ。

戦争真っ只中なのにこのボケボケ具合。

トップにみられたら終わりです。

でも、楽しむために各陣営と指揮官は奔走する！

真面目に仕事をやってるフリをする！

監視将校も憲兵も買収する！

全ては娯楽を享受するために!!

目次

ある日の指揮官	1
ユニオンと派閥争い	4
煙草と指揮官	20
ロイヤルとゴルフ	30
前編	
ロイヤルとゴルフ	44
後編	
指揮官と正月	54
重桜と名称	61

ある日の指揮官

セイレーンとの戦いが少し落ち着き早数年。

街中には活気が戻りつつあり戦時であることを忘れてしまうような風潮だ。

ところが、軍人という職業はなかなか難儀なもので、民衆が呑気になつてもその空気に流されてはいけない。

ということでもない。

アズールレーン陣営におけるとある基地。

ここの指揮官は廊下を走っていた。

必死な顔つきで、ある人に会うために。

着いたところは憲兵宿舎のある部屋

呼吸を落ち着け戸を叩く

「失礼するぞ」

部屋の戸が開かれ、指揮官は部屋の中に入っていく。

中には2人の青年が服装を整えた常態で気を付けをしていた。

「指揮官殿に敬礼!!」

青年の一人の号令と共に海軍式の敬礼を指揮官に向けて行った。

指揮官は彼等に対して敬礼を返す。

指揮官が敬礼を解くと

「直れ!」

号令の後に2人は敬礼をやめ、気を付けの体制戻る。

「2人とも楽にしてくれ」

青年達は休めの体制になり、目を指揮官に向けたまま微動だにしない。憲兵として、一兵士として上官に対し、失礼のない状態を維持しているのだ。

2人に対して視線を一通り送り、指揮官は懐から小箱を取り出す。「これから君達にこの箱の中身を渡す。受けとれば私が言わんとすることをわかるだろう」

2人の青年はゴクリ…と唾を飲み込む。

指揮官は箱の中身を取り出した。

中には紙切れが4枚と金貨が2枚入っていた。

指揮官は青年達に対しそれぞれ紙切れ2枚と金貨1枚を与える。

手にした紙切れを確認した青年達は目を見開きわなわなと震えた。

「指揮官殿、発言よろしいでしょうか？」

「許可する」

「本当にこれを頂いてよろしいのですか？」

「もちろんだとも、君達はそれに値するだけの働きをした。」

「だが…、と指揮官は言葉を続ける

「これからのためにも君達にはこれまでと同じく私の手伝いをしてもらいたい。決して強要はしない。やめたい時は何時でも相談に来るがいい。私から推薦状を書き、別部隊への上層部に掛け合おう。」

その言葉を聞いた青年達はこめかみに銃口を突きつけられたような恐怖の表情を浮かべ、慌てた様子で答えた。

「滅相もございませぬ！指揮官殿には数多の恩義があるため、それを返すためにも、より一層尽力させていただきます！だから！何卒別部隊だけはご勘弁を!!」

指揮官は青年二人に表情を隠そうともせずニヤリと口角を上げ2人を見回した。

「その言葉が聞きたかったよ。では、君達にはこれから任務を与える。」

指揮官は任務と聞いて真剣な表情に変わった2人を確認して大きく息を吸った。

「お前ら2人ともこれから休暇だああああ!!!任務は休暇期間中は犯罪、規律違反行為以外自由に過ごせ！お小遣いは金貨1枚だ！お釣りは持ってけドロボー!!」

「いやったああああああ!!!」

さっきの空気はどこへやら。部屋の中が一気に大学生の一人暮らしの部屋で飲み明かすサークル仲間達みたいな雰囲気へと変わった。

「指揮官殿！ありがとうございませぬ!!今から街で遊んできます!!」

「おう！全力で楽しんでこいよ！面倒毎はお前らの上官に頼んどくか

らな！」

青年の1人は笑顔で更衣室へ向かっていった。

「指揮官殿！指揮官殿！KAN—SENの子と遊んでも良いですか？
如月ちゃんと睦月ちゃんと公園へ行きたいんです！」

「非番か確認しとけよ！あと、アークロイヤルは俺にまかせな！あの
2人をまかせたぞお兄ちゃん！あ、でもお菓子を与えすぎるなよ。」
「そんな殺生な……」

「お前なあ、可愛い可愛いで好きなものを与えまくったらろくでもない
女になるぞ。可愛いあの子達を自分の手で台無しにするのか？」

「うっ…わかりました。自重します。」

「分かればよろしい。さあ行ってこい！2人が待ってるぞ！」

「ありがとうございます！お義父さん!!」

もう一人も輝かしい笑顔で更衣室へ向かった。

「ふっ、誰がお義父さんだよ……」

部屋に残されたのは指揮官ただ一人、清々しい笑顔を浮かべてい
た。

「さて、執務室に戻って書類仕事するかあ……。」

大きくあくびをしながら指揮官は部屋を出て執務室へと歩を進め
て行く。

多くの基地で働く者達の笑顔の未来のために指揮官は今日も誰か
の休暇の予定を捻出するため、仕事量の調整をする……

ユニオンと派閥争い

ユニオン寮

ユニオンのKAN—SEN達が生活する施設である。

普段平穏である食堂で珍しく議論が紛糾していた。

「やはりコーラと言えば赤い方だろう！」

「バカは程々にしなさい！青い方に決まっているに決まっています！」

どうやら戦艦同士で好きなドリンクについてもめているようだ。

最初こそはたった2人だけの議論だったんだが、次第に派閥が拡大し今や食堂を一杯にするほどに拡大した。

「どうしてこうなったんだ…」

2つの勢力の間で座っている指揮官は天を仰ぎそう呟いた。

事の発端は1時間ほど前に遡る…

「ドリンクサーバーの新設？」

食堂にて戦艦ノースカロライナと戦艦ジョージアは、ユニオン寮の視察に来ていた指揮官から聞いた話を復唱した。

「そうだ。今回、民間企業からの提案で、試験的にこの寮にドリンクサーバーを置いてみようということになったな。こちら側の補給課からの承認は出ている。」

食堂の机にパンフレットを広げた指揮官が蛍光ペンを片手に話を続ける。

「君達より先にエンタープライズにも聞いたんだがな…。食に無頓着すぎて意見がまとまらなかった。」

これにはさすがの2人も苦笑いを浮かべる。

「それで、君達に意見を貰いたいと思ってるね。」

「でも、何で私達なんです？私に至っては特に好きも嫌いもないとい

うのに」

ノースカロライナは疑問を浮かべる。

続けてジョージアも

「確かにこの人選には少し疑問はあるな。ノースカロライナも思っているだろうが、別に私達じゃなくても良くないか?」

ノースカロライナも頷く。

「2人を選んだのにキッチンとした理由はある。実は今回つくドリンクサーバーはソフトドリンクサーバーなんだ。今考えているサーバーはコーラの種類が違うんだ。」

ジョージアは何かを察した。

「つまり、私にはコーラが好きとしての意見が欲しいということか?」
「その通り」

「では、私はどうなんですか?」

ノースカロライナは首をかしげ指揮官に問う

「ノースカロライナは好きでも嫌いでもない。だからこそその回答を取り入れたかったわけだ。」

「そうなんですね」

ノースカロライナはなるほど、と納得した様子だった。

2人が納得した様子を確認し、指揮官はカタログを広げマークして
る部分を指す。

「私の方である程度目星はつけているんだが、この2つのサーバーの
どちらの方がいいか聞きたい。」

するとジョージアとノースカロライナは迷わずそれぞれ別のサー
バーを選んだ。

一瞬空気が凍りついた。

指揮官はあまり気にせずに続けた。

「おや?分かれたな。それぞれ理由を聞こう。まず、コーラ好きの
ジョージアから聞こうか」

「ああ。こつちを選んだのはコーラの元祖のメーカーだからだ。一般
的知名度も高く、コーラ好きの私としてはこちらの方が好きだ。もう

一方よりも大衆受けはするだろう。」

ジョージアは自信に満ちた表情で話した。

ノースカロライナは穏やかな表情をしながらも殺気を放っている。さすがの指揮官もこれは流すことが出来ず、少し焦った様子でノースカロライナに訪ねる。

「ジョージアの意見は分かった。では、ノースカロライナはどうして選んだんだ？」

「ええ、私がこちらを選んだのはこちらの方が無難だからです。ジョージアの方はあくまでコーラ好きとしての意見。コーラ好きじゃない人がそちらのコーラを好むとは言い切れません。知名度も謙遜なく、大衆受けに関しても負けません。むしろ、こちらの方が大衆受けするとも言えます。」

少し喧嘩腰で話を続ける。

「2つ並んでたとしたら私はこの青い方をとります。特に好き嫌いがいいですけど、赤より青い方が手に取りやすいんです。だから、青の方が万人に受けますね」

微笑みながらジョージアに対し敵対感を出してる。

ノースカロライナの発言を聞きジョージアは分かりやすく敵対感むき出しで

「いいや、知名度も大衆受けも赤い方だね。チェーン店に行ってみてもコーラは赤い方が多い。」

ノースカロライナも負けずに

「それはあなたが行って店がそういう店に片寄ってるだけじゃないんですか？ファミリーレストランとかは青い方が多い気がしますけど。」

「君の方こそ片寄っているんじゃないか？こちらの方が世界的メーカーだぞ？各陣営に法人だって持つてる。知名度はこちらの方が上だ」

「あくまで企業戦略っただけでしょう？こちらだって各陣営の企業に委託する場合はあれど、売っています。知名度は勝るとも劣ることはないです」

「なんだと?」

「なんですか?」

2人の間の空気が張りつめてるどころではなくなった。すでに戦いの火蓋は切って落とされてる。

「落ち着け2人とも!」

指揮官は流石に不味いと思い2人を落ち着かせようと試みる。

だが、2人はもう止まらない。

「指揮官!邪魔をしないでくれ!この分ならず屋をどうにかしないといけない!」

「分ならず屋はどちらですか!貴方の方が理解できていないでしょ!」

「ユニオンのコーラと言えば原点にして頂点の赤い方に決まってるだろうが!」

「何が原点にして頂点ですか、寝言は寝ていいなさい!2番目だから味が劣るなどということはないです!味の進歩をさせてから発言しなさい!」

「今の発言は看過できないな!これだから独善的で排他的な青色主義者は!頭の中まで青色一色の上の空と来たか!」

「見境なくコミーに媚を売ったにも関わらず失敗した企業が何をいいますか!赤色主義者は血の色と同じ色をしているだけ野蠻極まりないですね!自由の象徴であり理性的な色である、青色こそ正義です!」

「コミーに魂まで売ってる奴等には言われたくないね!何が理性的な色だよ!劇薬みたいな思考回路をしてるのを自分自身で皮肉っているのかい?」

2人の口論は壊れた水道管のごとく勢いが落ちない。

指揮官は何とか納めようとするが、話の間に割り込むことすら難しい。そんな中…

「しきかーん?どうしたのー?」

いつも明るいKAN—SENから声をかけられた

「サンディエゴ…」

「何か揉め事みたいだねー。しかもあの2人となると珍しいけど。」

「サンディエゴ、実はな…」

指揮官は現状についてサンディエゴに説明した。

ふんふん、と頷きながらサンディエゴは興味津々で聞いている。

そして、あちやーという表情を浮かべながら

「指揮官、やっちゃったねえ…。それはかなりナイーブなやつだね。」

「この結果を見ればどんなにバカでも分かるさ…」

指揮官は項垂れる。自分が聖域を侵し、内戦まで発展させてしまったことを凄く後悔している。

それを他所にサンディエゴはイタズラな笑みを浮かべて

「それで、それで！指揮官はどっちがいいの？」

「え？」

「だーかーらー、赤と青のどっちが指揮官は好きなの？」

サンディエゴは小悪魔みたいに尋ねる。

ここでどちらかを答えれば全てが収まる。ただし、一勢力の禍根を残した状態で。いくら戦場に私情を持ち込むことがご法度だとしても、少なからず連携に悪影響を与えるだろう。

指揮官は返答に困った。正直どちらでもいいのだ。ユニオン陣営の労いになるのであれば。

「もちろん、私の髪色に近い赤だよねー☆」

サンディエゴは指揮官の腕に抱きつき、期待した目で見つめる。

甘えることで自らに勢力に取り込もうとしているのは端からみても理解できるものだ。

言い争いをしてきたジョージアとノースカロライナも、言い争いをやめ、指揮官がどちらを選ぶか見ていた。

現状の勢力として赤が人数的に優勢であり、実力行使にも出ている。しかし、ノースカロライナは反論をすぐにしない。しかし、劣性を覆さないわけではない。ノースカロライナが出る必要がないのだ。なぜなら…

「いいえ、指揮官くんは青の方が好きよね」

指揮官の耳元で官能的な口調で話しかける。

びつくりして指揮官が振り向くとセントルイスが妖艶な笑みを浮かべて立っていた。

「ちよつとー邪魔しないでよー」

「あら、邪魔はしたつもりないのだけれど。それで指揮官くんはどっちがいいかしら?」

そう言葉にしながら、セントルイスはサンディエゴとは逆の指揮官の腕を抱き寄せる。

自然と身体を寄せ合う形になり、豊満なセントルイスの身体の感触が腕から伝わってくる。

「もちろん、私の髪色と同じ青色よね」

「またもや、指揮官の耳元で囁く。」

それを見たサンディエゴはプクーつと頬を膨らませ、負けまいとより指揮官の腕を抱き寄せる。

「違うんだからー指揮官は私の方を選ぶに決まってるわ!」

セントルイスは余裕の表情をうかべて

「ふふふ、やけになっちゃって。冷静さを欠いたらだめよ。ねえ、指揮官くん」

ペースは完全にセントルイスの流れだ。

一瞬劣勢になった青が一気に巻き返し、今や青の方が流れに乗っている。

赤としてはあまりにも不都合な状態である。

そんな中

「る、ルイス!!あんた何やってるのよ!!」

ホノルルが顔を真っ赤にしてやってきた。

「指揮官にそんなことするなんて…は、は、は、は、ハレンチよ!!!」
「ビシツとセントルイスを指差し、目をグルグルさせながら叱る。」

しかし、セントルイスはどこ吹く風かの如くクスクス笑いながら「あら、ホノルル。今私ね指揮官くんとだーいじなお話してるの」「だ、だからってわざわざそんな近くなくてもいいじゃない!!」

ホノルルは動揺しきってる

セントルイスは満足したのか、微笑みながら

「そうね。ピツタリつく必要はないわね。私が好きでやってるのよ、からかってごめんなさい」

「そうよね…私間違つてないわよね。ん?…からかった?好きでやってる?」

「それよりホノルル、貴方はコーラを選ぶなら赤と青どちらか好きかしら?私は青の方が好きなんだけど」

疑問を抱いたホノルルに有無を言わずにセントルイスは質問する。

「え?ルイスは青の方が好きなの?」

ホノルルはキョトンとして答える。

セントルイスの微笑みが固まった。

この流れはさつきも近いのを見た記憶がある。

指揮官は頭痛がしてきた。

「赤い方がいいじゃない。私はそっちの方が好きよ」

ホノルルはセントルイスの変化に気づかず、正直に自分の思いを口にする。

また、形勢が変わった。

セントルイスは指揮官の腕を離し、ホノルルに歩みより

「…ホノルル。ちよつとお話ししましょう」

少し怖い口調で腕を引っ張ってホノルルを食堂の外へ連れ出す

「え!?何で!?好みの問題じゃないの!?待って!指揮官!ルイスを止めて!待って!ルイスやめて!やだ!待って!違うのおおお…」

ホノルルはセントルイスに引き摺られて別の部屋に連れてかれた。

ごめん、ホノルル…あのセントルイス怖すぎて何もできなかった…

頼りない指揮官でごめんな。後でアイス買ってあげるから。

指揮官は心の中で合掌するしかなかった。

「みんなして何してるんだ?」

「ん…眠い…」

食堂に来たクリーブランドとラフィーが話しに入ってきた。

「コーラなら赤と青どっちが好きって話してるんだよー☆」

サンデイエゴが2人に簡単に説明する

「コーラかあ、私は赤だな」

「ラフィーも」

2人はあつさり答えた

それを聞いたジョージアは鬼の首を取ったかの如くノースカロライナに対して

「どうだ、見たことか！やっぱりコーラと言ったら赤い方なんだよ！」「ぐぬぬ…」

流石のノースカロライナも数的な圧倒的劣勢にモノが言えない。

「やあ、皆どうした？いつもより随分殺伐としているな」

「ホントホント、皆どうしたのー？」

ボルチモアとブレマートンが来た。

好機と見たのかノースカロライナはすかさず二人に問いかける

「こんにちは。突然で申し訳ないんですが、お二人はコーラと言えば赤と青どちらがお好きですか？」

突然の質問で2人とも動揺したがすぐに

「私は青かな」

「アタシも青の方かな」

圧倒的な数的劣勢をやや劣勢に持ち直した。

「そうですよね！お2人が理解してくれて嬉しいですよ！」

感激のあまりノースカロライナは2人の手を取りブンブンと興奮気味に握手する

しかし、ジョージアは面白くなさそうな表情を浮かべた。

そんな中、エセックスが近くを通った

ジョージアはそれを見逃さず呼び止めた。

「おーい！エセックス！少しいいか？」

「何？ジョージア？…え？何この状況…」

呼び止められたエセックスは若干引き気味に答える

そんなことはどうでもいいようにジョージアは続けて問いかける

「エセックスはコーラなら赤と青どっちがいい？」

ジョージアに食い気味で聞かれ、エセックスはたじろぐ

「何よそれ…。まあ、青い方が好きね」

「shit!!!」

「!?まさか、あんたらそれで揉めてたの!?」

エセックスはジョージアの態度を見てすぐに察した。

ノースカロライナは笑顔でエセックスの方を見ている

エセックスはその視線に気づき、ジョージアから離れるかの如くとして、とその方向に向かった。

現在、赤対青は退場したホノルル、セントルイス含めても同数の戦いになった。

ついに口論から手法を切替え、民主主義らしく勢力の数で勝負に決着をつけようとジョージアとノースカロライナは色々なKANSENに声をかけ勢力を伸ばしていった。

そして、冒頭に戻る。

指揮官は天を仰ぎ、ボソツと呟いた

「助けて…誰でもいい…エンタープライズ…赤城…イラストリアス…」

その漏れ出た一言の直後に食堂の窓ガラスが甲高い音と共に割れ、食堂の壁の一部が吹き飛んだ

割れた窓から二人の影が食堂内に侵入し、砂埃をあげる壁の向こうからは1人の人影がこちらに向かってきている。

「指揮官様く?お呼びになりましたか?」

「指揮官様、貴方のイラストリアスが参りましたよ」

「指揮官、私を呼んだか?」

食堂に轟音と共に侵入してきた、赤城、イラストリアス、エンタープライズの3人だ。

一瞬、他のユニオンのKANSEN達は3人の侵入に動揺したが、すぐにそんなことお構いなしに議論を再開する。

指揮官は、3人の名前を呟いたことを少し後悔しながらも藁にもす

がる思いで3人に事情を説明する。

「指揮官様はなんとお優しいでしょうか。こんな自己権利を振りかざし、争いの火種を撒く連中にも労いを忘れないなんて」

「指揮官さま。さぞ、お疲れでしょう？どうですか、一段落したらロイヤル寮にいらしてアフタヌーンティーでも」

「すまない指揮官。私が決めていれば良かったんだが、無頓着だったものであまり深く考えてなかった」

「3人とも心配してくれてありがとう。少し発言に気になるところがあるが3人の意見を聞きたい」

先んじてイラストリアスが話はじめる

「指揮官さまの判断は間違っではないませんわ。ですが、決断は間違っている」と助言いたします」

「ほう？」

「判断として多くの意見を取り入れるのは、非常によい指標になります。ですが、決断するのまで委ねてしまうと大きな禍根を生みかねませんわ。最後に決断をするのが裁定者であればこそ、最低限の禍根を残す形で済みます」

イラストリアスの意見の直後に赤城が意見を述べる

「指揮官様、少し補足させていただきますわ。裁定者が最後に決断することで両陣営に『裁定者が決めたことだから』という共通認識が生まれますわ。案が採用された陣営には安心を、不採用にされた陣営には責任の追求先が与えられます。だからこそ、最小限の禍根で済みますわ。まあ、指揮官様に責任を追求したら私が黙っではないませんわ」

赤城がコロコロと笑いながら述べる。

赤城の意見にすこし指揮官は苦笑いを浮かべる。

その後、エンタープライズが真剣な眼差しで

「指揮官。こうなってしまうたのには私にも責任の一端がある。ユニオン寮の代表として私とその役を買って出よう」

そう述べると、議論を交わす陣営の間に割って入ろうとする。

しかし、指揮官はエンタープライズの腕を掴みひき止める。

「エンタープライズ、君がやる必要はない」

「何故だ？」

エンタープライズは指揮官の方に向き直り、問いかける

「2人の意見を聞いて気付いた。私がこの場の責任者だ。どこか他人事のように思っていたのかもしれない。だが、この議論の引き金を引いたのは私だ。責任の所在は私にある」

「だが…」

エンタープライズが話そうとするとところを遮り、指揮官は話を続ける

「この議論を聞いているうちに私にも意見ができた。だから、それを私の責任を持って実行する」

そして、指揮官は不安そうな表情を浮かべるエンタープライズに向けて

「だから、エンタープライズ。良ければ君には私の意見の賛同者になって欲しい。責任者は私だ。だが、君は私一人で責任を負うことに抵抗を抱くだろう。だからこそ、賛同者になって欲しいんだ。そうすれば責任の一端を背負うことになる」

その言葉を聞いたエンタープライズからは不安の表情が消えた。

そして、笑みを浮かべて

「指揮官はそういう人だったな。わかった、その意見に賛同しよう。私は貴方の賛同者だ」

「融通がきかない頑固者で悪いね」

「なあに、いつものことだ」

「2人もありがとう。今度何かお礼をするよ」

「迷いが晴れたようで良かったですわ」

「お礼楽しみにしてますわね」

「お手柔らかに頼むよ」

指揮官はエンタープライズを連れ、議論の渦中へと進んでいく。

議論の中心であるジョージアとノースカロライナの間に入り、指揮官は一拍大きな音を立てる。

「君達、静粛に」

先程まで白熱していた議論は嘘かのように静まり返った。

瞬時に静まり返ることからも、どこかしらで両陣営共に議論が平行線でどこまでも続くことを理解していたのだろう。

そこに裁定者となるべき指揮官が入ってきた。

何かしらの結論が出されると期待を寄せたのだろう。

指揮官は両陣営に目を配り、話し始める

「君達の見解はよく分かった。だが、このままでは議論は平行線だ。だから私から代替案を提示する。もし、それに納得できない者がいるなら、即時意見申し立てをしなさい」

後ろについているエンタープライズに目配せをする。

エンタープライズは無言で頷く。

両陣営とも指揮官に注目する。

「ドリンクサーバーについてだが、本来1台だったのを2台にする。しかし、軍の資金を使えるのは1台のみでしか予算がない。そこで、私のポケットマネーにてもう1台を試験的に導入する。その後のことは導入後に考える。これで決着としよう」

食堂にどよめきが起こる

2台導入することはある種禍根を残さない最善策とも取れるが、資金を指揮官の負担とするのだ

両陣営とも指揮官には恩義を感じているために負担を強いることになるうとは思ってなかった

流星の賛同者として後ろについていたエンタープライズも動揺していた。

動揺を無視して指揮官は続ける

「何か意見はあるか？ ない場合この案で決定し、経理部に通すぞ」

「待ってください」

ノースカロライナが声をあげた

「私達の問題を指揮官のみに負担を強いるなど到底看過できません」

「ほう。しかしノースカロライナ、私は責任者だ。君達の議論の終止符を打つ責任を持つことは当然じゃないか？」

指揮官は意地悪に問いかける。

意地でも自身をスケープゴートにするつもりだ

ジョージアもノースカロライナに続けて声をあげる

「だからといって責任の取り方があまりにも大きくないか？結局指揮官のみの負担となっていているように感じる」

「そうしなければ、君達の片側の陣営に負担を強いることになりかねないか？私は責任者として、それを看過することはできない」

「私は指揮官の意見に賛同しよう」

エンタープライズはここで指揮官に賛同する。両陣営にさらに動揺が走る。

「私は指揮官の賛同者だ、だから指揮官の負担の一端を担う覚悟がある」

ユニオンの代表格が声をあげることにより、議論の流れは完全に指揮官の意見を採用する方針に傾きはじめた。

しかし、ノースカロライナもジョージアもあまり歓迎したくない意見の流れだ。

そんな中…

「じゃあ、私もその導入資金の負担をします」

エセックスが声をあげた

「エセックス、どういうことだ？」

指揮官は訝しげにエセックスにたずねた

「どうもこうも、私もエンタープライズ先輩と同じく賛同者になるってことですよ。負担の一端を担うことになるってことは指揮官の賛同者になるってことでしょうか？」

「いいのか？君の陣営を裏切ることになるかもしれないんだぞ？」

指揮官はエセックスにも意地悪に問いかける。

自己犠牲をしてでも責任者を作りたいという信念があるからこそだ。禍根はなるべく最小限にしたい。その為に自己を犠牲にすることなど厭わない頑固者であった。

「そんなことを裏切りとする陣営に所属した覚えはありません。その程度で裏切りとするぐらいなら私から願い下げです。」

淡々とエセックスは話し続ける。

指揮官は黙り込んだ。

それを勝機と見たのかジョージア、ノースカロライナ共に声をあげる

「では、私も負担をしましょうか」

「私も負担をしよう」

2人の声を皮切りに、両陣営から指揮官の賛同者が増えてきた

最終的には賛同者しかいなくなっていた

「お前ら、どういうことだ…」

指揮官は動揺していた

指揮官の目論見では責任者に責任を押し付けて、ハイおしまい。両陣営ともハッピーエンドだったはずなのだ。

しかし、今やどうだ。

責任者の所在はいないも同然。総意となつてしまった。

エンタープライズは笑いはじめた

「ははは！指揮官、今回は私達の敗けのようだ。いや、歴史的な大勝利かな？」

「はあ…分かった…2台目の導入に関してはユニオン全体と私の負担としよう。」

指揮官のその声を聞いた途端さつきまでの緊張が嘘のように無くなり歓声が上がった。

イラストリアスと赤城はその光景を眺めていた

赤城はイラストリアスに向けて

「あなた、こうなることを分かってましたわね」

イラストリアスはニコニコしながら赤城に対して

「それは貴女もでしょう？」

赤城は嫉妬を決して隠さない状態で話す

「全く、憎らしいロイヤルですこと。付き合いが長いことがそんなに誇らしいですか？」

「フッフ…貴女も私と負けないくらい指揮官さまとは長い付き合いいでしょ？お互い様ですわ」

「全く皮肉すらこんな風に返されては、争いがいいですわ」

「貴女と私もかれこれ長いですからね。お互い気苦労が絶えないですわね」

「本当、その原因の一端に言われたらたまったもんじゃないですわ」
赤城はイラストリアスの発言に呆れ果てて指を弾く。

するとどこからともなく重桜の空母である加賀が姿を表した。

「赤城姉様、お呼びですか？」

「加賀、ユニオン寮の食堂のガラス修繕の手配をしておきなさい。なるべく内密にね。外部にでもバレたら面倒だわ」

「わかりました。」

そういうと加賀は瞬く間に姿を消した

「あら、赤城さん。わざわざ受け持ってくださいるのかしら？」

イラストリアスは微笑みながら尋ねる

「今回だけよ。ユニオンの連中にも、貴女方ロイヤルにも貸しを作っておきたいしね。」

「あら、怖いですわ」

「ここにも思っていないこと口にしなくて頂戴」

「バレてますか」

「当然じゃない」

「あらま、昔とは違うってことですわね。では、私も同じようにユニオンに貸しを作っておかなければね。」

パンパンっとイラストリアスが手をたたくと、背後にメイドが現れる。ロイヤル陣営のメイド隊の筆頭メイド、ベルファストだ

「イラストリアス様、ご用件を」

「ベル、ユニオン寮食堂の破壊された壁の修繕をお願い。どの程度かかるかしら？」

「修繕自体は1日あれば終わりますが、養生でもう数日頂きたいです。」

「分かったわ、早急にね」

「了解いたしました」

その言葉を最後にベルファストはその場から消えた
「貴女も強かね」

「お褒めに預かり光栄ですわ」

「ふん。もういいわ、私帰るから」

「お疲れさまです」

赤城は赤い焰となりその場から姿を消した。

イラストリアスもその姿を見送り、指揮官とユニオンのKAN—S
EN達の方角を眺めて

「さて、私も戻るとしましょうか」

そう言っユニオン寮を後にした。

後日、ユニオン寮の食堂には修繕された窓や壁と共に赤いロゴの
コーラがデザインされたドリンクサーバーと青いロゴのコーラがデ
ザインされたドリンクサーバーが並んでいた。

各々紙コップで自由にドリンクを注ぎ、仲良く談笑している。

煙草と指揮官

煙草…

それは、百害あって一理あるかどうかすらも怪しい嗜好品である。基本かつこつきたいから、大人の真似して吸いはじめた人がほとんどな気がする。

かくいうこの基地の指揮官もその一人である。

また、この基地に所属する男性兵士の半分は喫煙者だ。

KAN—SENにも嗜好品として嗜む者もいる。

そんな、喫煙者達の幕間のひととき…

基地内喫煙所

ここは喫煙家のオアシスであり、談話の場であり、情報共有スペース。

そして、喫煙家の最終防衛ライン

それ以外は基地内全面禁煙。

喫煙家にとって世知辛い世の中なのである。

「俺、煙草やめようかな…」

海軍憲兵隊所属の青年が紫煙を吐きながら呟く

「どうした、曹長。暗い顔をしてらしくないじゃないか」

指揮官は尋ねる、愛煙家だった青年が突如として禁煙をしようとし

ているのだ。

今はまだ独り身の青年を突如として自分の好きなことを絶とうと
してるのだ。

余程のことがあるのだろうと考えてしまう。

「最近、駆逐艦の子達と遊んでるとお兄さんなんか臭いって言われる
んですよ…」

「ああ…そういう…」

「言われたときはかなり心にきましたね…」

「子供は正直にものを言うからな」

青年はすっかりどんよりしていた。

今まで愛娘のように可愛がった子から無垢で鋭い言葉を食らった
のだ。

誰だって辛い。指揮官も割り切つてなかった時はガチで辛かった。
本当に自分の娘、息子なんかに言われたら割り切つても辛い。孫な
らもつと辛い。

「その気持ち分かるぞ。私も赴任してしばらくした時に言われた。滅
茶苦茶心の奥に刺さるよな。アレ」

「指揮官殿も同じ経験をされてるんですね…」

「私だけじゃない。ここの喫煙家はほぼ全員言われてる。君のところ
の隊長もだ」

「ええ!?!あの隊長すら言われたんですか!?!」

「私も驚いたよ。キチンと消臭剤をかけて臭いを消し、喫煙家はもち
ろん嫌煙家にすら喫煙家であると感じさせない、あの憲兵隊長殿です
ら言われてる」

「子供ってかなり鼻が利くんですね」

「全く恐ろしいものだよ子供というのは」

「ええ、そうですね」

彼等が話してる子供は決して一般的な人間の子供とは大きくこと
なる部分があるが、子供は子供という認識なのだろう。

指揮官と青年が話していると、喫煙所の扉が開かれる。

海軍陸戦隊の制服に身を包み、腕章には憲兵とかかれた40代前半

の男が入ってきた。

青年は姿勢をただし、すぐさまその男へ敬礼をする。

「お疲れ様です！憲兵隊長殿！」

「ここでは堅苦しくするな。崩せ」

「はー！」

憲兵隊長と呼ばれた男は青年を一瞥すると胸ポケットから煙草をだし、喫煙室に置かれていたマッチで火をつける

そして、肺にその煙を吸い込み、紫煙を吐き出す。

「憲兵隊長殿、今日は珍しいのを吸ってますな」

「おお、指揮官殿は気付くか」

「何回ここで話したと思ってるんですか」

「そりやそうか」

ははは、と指揮官と憲兵隊長は笑いあう。

青年は意外そうな顔で2人を眺める。普段見せる上司たる憲兵隊長と様子があまりにも違うからだ。

指揮官はそれを横目で確認しつつも話を続ける。

「そう言えば何を吸っておられるのですか？」

「ああ、ユニオンの連中からユニオンスピリットなる煙草を貰ったんでね」

「憲兵隊長も賄賂を堂々と頂くようになりましたか」

「バカ言え、たまたまいつも吸ってる煙草を箱ごとユニオン寮のKAN—SENに渡したら、お礼につてくれたんだよ。等価交換だ」

「なるほど、そう言うことになっておきますよ」

「こんの若造が、生意気言うようになりやがって」

悪態をつきつつも2人は仲良く会話を続ける

「それにしてもユニオンスピリットですか：確か燃焼が遅いらしいですな」

「確かにいつも吸ってるやつよりは大分遅いな」

「コイツもユニオンスピリットをよく吸ってるんですよ」

突然、憲兵隊の青年の方に指揮官は話を振った

「ほう、お前もそう言えば吸うんだったな」

「は、はい！」

「しかし、銘柄は知らなかった。君がいつここに来てるかも知らなかったしな」

「隊長殿、もしかして嫌われてます？」

「うるせえ！」

指揮官は相変わらず茶々を入れる。それに対して憲兵隊長はリアクションをとっている。いつもの光景だった。青年は上官を決して避けているわけではないと弁明する

「し、小官は業務に支障を出すことがないよう見回りの休憩時間にこちらに来ております！」

「なるほど、そりゃ会わんわけだ。俺と君は休憩時間が被ってないからな。」

憲兵隊長も納得し、そして感心した。

キチンと責務をこなし、業務外は迷惑のかからない範囲で息を抜く。規律ある軍人の姿を確認できたのだ。

「しかし、それだと今回憲兵隊長殿がいるのは変ですな。もしやサボりですか？」

「しらばっくれやがって。てめえが休暇を取らせたんじゃねえか。働きますぎだー！って上官命令使ってな」

「そーいやそうでしたな」

「では、何故制服を着て基地に？」

青年は素朴な疑問を尋ねた

憲兵隊長は紫煙を吐いて疲れたように呟く

「またヤツが面倒を起こしやがった」

「ヤツって、まさか…」

「ああ、君の天敵だよ」

「ヤツですか…」

憲兵隊長と青年は理解をした。指揮官は理解したいけど理解しなかつたから、確認する。

「すまない、私にはそのヤツが、あるKAN—SENだと思っただが…」

「ああ、テメエんとこのロイヤルの輩だ」

「…聞きたくないが今回は何を？」

「重桜の駆逐艦が水遊びしてるところを超望遠のカメラで盗撮しているという報告が部下から来た」

「…あのバカっ！」

指揮官は頭を抱えた。ニコチンとタールを吸った頭にもガツツリ響くような悲報である。

「憲兵隊長、小官も同行することは？」

「ああ頼む。ヤツを捕まえられるのは今のところ駆逐艦を除けば俺と君ぐらいしかない」

「了解しました」

「それと指揮官殿」

憲兵隊長は指揮官に向かって悪い笑みを浮かべる。

「今回も内々で処理してやる。あとは分かっているよな？」

はーっと指揮官はため息をつき

「はいはい。いつものカートンで寄付ですね。しかも、休日出勤までされちゃあ気付け薬も追加で寄付かあ…」

「おいおい、若造にもキチンと渡せよ」

「わあーってますよ。曹長、君はいつものカートンでいいか？」

「よろしくお願い致します！最速で捕まえますよー！」

「その心意気やよし！行くぞ曹長!!」

「はい！隊長殿！」

上司と部下である2人は仲良く喫煙室から出ていった。

なお、いつものとは憲兵隊長と曹長が愛煙している煙草をそれぞれカートンでプレゼントということだ。

気付け薬は秘蔵の重桜産のウイスキーである松亀である。

それを寄付という名目で指揮官から渡すことで内々で処理して貰っているのだ。

指揮官は一人になった喫煙室で新しい煙草に火をつける。

アルクローヤル

指揮官の愛煙している煙草である。

そして紫煙を吐いたあとに一人呟く

「あー…きつついなあ…」

煙草もタールがキツイものを吸ってはいるが、仕事も激務だ。内々で外部に漏らさないようにしているのは、緩さを他の基地の連中や上層部に見せないため。つまり、基地外部の敵に尻尾や隙を掴ませないためである。

何事も緩急が必要。ここの指揮官のモットーである。しかし、これは上層部とは相容れない。

上層部は政治や世論との絡みも発生し、対外的な評価が非常に重要になる。政治や世論は結果を求める。しかも、結果を出すのは当然であり、過程にすらも目を光らせる。

少しでも過程や結果に不満があれば、大体は己のことを棚にあげ、声高に批判と称した罵詈雑言で揚げ足を取る。

上層部は自分達が不自由に動けなくならないように、そして組織の意見を通しやすくするために周りの目を気にしなくてはならない。

指揮官も重々それはわかつている。己も上級将校の一員であり、海軍学校で学んだ士官なのだから。

だからこそ、基地の外に悩みの種を蒔きたくない。

身内が緩んでる所を、敵に勘繰られて基地内の誰かが処分になったとしよう。その書類手続きなどの要らぬ面倒が起きる。ましてや進行中の作戦を台無しにされる危険性もあり、最悪の場合前線の一部たるこの基地の壊滅、放棄も考えられる。

だが、世間は長期的損失よりも短期的な失敗に注目するのだ。

それは、平和な世の中でも戦争中でも変わらない。

だからこそ、火の気が立たないように公人は躍起になるのだ。

ここまで長々説明したが、簡単に言うと

あのロリコン空母がやらかして、下手に外にバレたら面倒ごとが起こる。だから、憲兵さん達にお願いして火消しをしてもらおう。

おかげで指揮官の頭が痛い。懐にも痛い。

指揮官は喫煙室の中で唸りをあげる換気扇を眺めながら、もう一本

煙草に火をつけると、思わぬ客人が入ってきた。

「あら、指揮官じゃない」

「…オイゲンか」

鉄血の幸運KAN—SEN、プリンツ・オイゲンだった。

オイゲンは懐から銀色のヴェストを取り出し、一本煙草を口元に啣える。

啣えたまま、オイゲンは上目遣いで指揮官の方を見る

「なんだ？」

「あら、指揮官にしては察しが悪いわね」

指揮官はわかっていたが気付かないふりをしていた。

おおよそ、火がないのだろう。しかし、喫煙所にはマッチとライターが常備されてる。

火がないわけではない。つけようと思えばつけられるのだ。

つまり、オイゲンはわざとつけていないのだ。別の要求をしたいがために。

勘が良い諸氏は気付いているだろうが、指揮官の煙草には火がついている。オイゲンは火がついてない煙草を啣えながら指揮官の方を見ている。

指揮官はオイゲンから目線を反らす

「あら、どうして目線を逸らすのかしら？」

「…お前分かって言ってるだろ」

「ふふっ…ほら、早く火を頂戴」

「そこにマッチとかライターがあるだろ」

「違うわ、そんな無機質なものじゃなくて、ね」

「…恥ずかしい」

「あら、可愛いわね。でも、ダーメ??」

イタズラな笑みを浮かべながらもオイゲンは指揮官との距離をジリジリと詰めてくる。

指揮官も徐々に後ろに下がっていくが、ついには壁に当たってしまう。

オイゲンは距離を詰め続け、ついには指揮官まであと半歩のところ

まで来た。指揮官は諦めの表情で煙草を啜えた。

「分かったよ、火をつけてやる」

「そうこなきや」

指揮官は煙草を啜えたまま火のついた先端をオイゲンの未着火の煙草の先端にくっ付ける。

シガーキスというヤツだ。

オイゲンは自分の煙草に火が着くよう息を優しく吸い込む。

己の煙草以外にも、指揮官の煙草や指揮官自身を堪能するかのよう
に。

無事に火が着き指揮官はすぐに顔をオイゲンから離す。

その様子をしっかりとオイゲンは確認し、イタズラな笑みを向け続
ける。

「何度もやってるにも関わらずウブね」

「仕方ないだろ」

「そこが可愛いわよ」

「可愛いと言われて喜ぶ男じゃないからなんとも言えん」

「ふふっ」

かれこれ、オイゲンとは長く一緒にいるが、からかわれることには
あまり変わっていない。

オイゲンはふーつと艶かしい形で紫煙を吐いた。

「そう言えばさつき憲兵がここから出ていったわね」

「ああ、アークロイヤル狩りさ」

「…大体察したわ」

オイゲンも見慣れた光景と判断し深く考えないことにした。

「ところで、今回は憲兵さん達の見返りはなんなのかしら？」

「…やっぱバレてるよなあ」

「あんたとは長い付き合いじゃない。分からないわけないわ。イラス
トリアスもエンタープライズも赤城も知ってるわ」

「そうだよなあ」

「で、今回は？」

「煙草1カートンずつと休出してる隊長にはウイスキーだ」

ウイスキーという言葉聞いた瞬間、オイゲンは一瞬ではあるが目を輝かせた

指揮官はマズイと瞬時に理解した、だが口にしてしまったがためにもう時すでに遅し

「指揮官、私なんだか酔いたい気分になってきたわ。そろそろ終業も近いし今夜お邪魔してもいいかしら」

「…ダメと言ったら？」

「今回の件を鉄血上層部に打診する」

「…はあ、分かった」

「もちろん安酒はダメよ。秘蔵のお酒がどこにあるかも分かっているんだから。」

「…ツチ」

「悪態をついても怖くないわね。小熊ちゃんが頑張って威嚇してるようにしか見えないわ」

オイゲンはクスクス笑いながら煙草の火を灰皿の上で消して、喫煙所の扉の方へ向かう

「じゃあ、今夜楽しみにしてるわね♥？」

「へいへい」

指揮官に手をヒラヒラさせながらオイゲンは喫煙所を後にした。

指揮官はそれを見送り、一人呟く

「はあ…美女の相手も楽しじゃねえなあ。戻って書類片付けるか…」

憩いの場が予想外の徒労を生む場になってしまったことにうんざりしながら指揮官は自らの指令室へと戻っていった。

指令室内でのお酒の集いでも一悶着あったが、それはまた別のお話

…

尚、アークロイヤルは憲兵隊長と曹長に発見され5分も経たず捕縛された。

現行犯逮捕された容疑者Aは「私は駆逐艦の子達に危害が及ばない

よう監視していただけた」と供述しているという。

ロイヤルとゴルフ 前編

ゴルフ

15世紀頃に現在の形に近くなった球技である（Wiki調べ）
発祥は諸説あるが、企業間や外交におけるツールとして用いられる
ことが目立つスポーツである。

しかし、ゴルフも本質はスポーツであり、下手な球技よりも繊細な
技術を要求されるものだ。

特に取引のツールとして長年用いられていけば技術が要求される
水準が高くなり繊細さが重要になる。

ゴルフは良くマナーが重視されるスポーツとも言われる。

打席にはいるときはキチンと同じグループの人間に挨拶をする。

ゴルフが下手な人間を連れていけば、コースを回る同じグループの
人間にストレスを与える。

打球を変なところに飛ばせばグループ全員でボールを探すうえに、
別のコースに入って他人に怪我をさせることも考えられる。

コースにいる全ての人間に配慮が必要なスポーツなのだ。

だから、かなり神経を使う。

しかも、道具は少しでも当たりが悪ければボールは飛ばない、飛ん
だもしても変な方向、最悪ボールに当たらないということもある。

だから、常に打つフォームなどにも気を配りつつ、相手を待たせな
いファストプレーが要求される。

ゴルフとは相手を思いやり、己と戦うスポーツなのだ。

ロイヤル保有ゴルフコース

通称ロイヤルゴルフクラブ

ロイヤル所有の島を一部改修しゴルフ場にした国際ゴルフ場である。

コースは基本に忠実であり、谷越えや、コースの3分の1以上を占めるような大きな池、やたら多いバンカーなども存在しない。

比較的難所が少ないことで有名なゴルフ場である。

芝もキチンと整備されており。自然に囲まれた清々しいゴルフ場である。

今回はロイヤル寮にてゴルフを嗜むKAN—SEN達と指揮官の親睦会である。

「着いたな—」

「ええ、着きましたわね」

ジャケットとチノパンを着た指揮官と長袖のブラウスとフレアスカートを纏ったイラストリアスが輸送機から降りる。

彼等の背後ではメイド隊が手荷物やゴルフバッグなどをゴルフ場へ運び出すために忙しく動いている。

「しかし、こんなに綺麗に晴れるとはな」

「まさにスポーツ日和ですわね」

「確かにそれに違わぬ快晴ぶりだ」

のほほんと二人が話していると、後ろから声がかかる

「良い場所でしょ？この私自らが設計や設備に助言したんだから」

「おお、陛下。長旅ご苦労様です」

ロイヤルのフラッグシップたるクイーン・エリザベスが輸送機から降りてきた。

その身は白を基調としたワンピースにロイヤルブルーのジャケットというこちらもラフな格好だ。普段とは違った大人びた雰囲気抱かせる気品のある色使いだ。

クイーン・エリザベスは指揮官の発言を聞き、少し呆れた様子で指揮官に告げる

「何言ってるのよ、私があなたを招待したんだから労うのはこちらで

しよ」

「そりやそうですな」

指揮官はハハハと笑う

イラストリアスもクスクス笑いながら、クイーン・エリザベスに向けて微笑みながら諭す

「陛下、指揮官さまなりの陛下への配慮でしてよ」

クイーン・エリザベスはその発言を聞き少し口を尖らせながら話す「下僕として当然の配慮だけど、今回は下僕である前に客人よ。少しはTPOをわきまえてほしいわ」

「ですって、指揮官さま」

イラストリアスは微笑みを崩さないまま指揮官に声をかける。

指揮官はわざとらしく困った顔をして

「こりや手厳しい。お手柔らかに頼みますよ」

クイーン・エリザベスは呆れた表情で指揮官に指摘する。

「厳しくもなるわ。名目でも私達を率いていることになってるんだから。それにふさわしい振る舞いをしてもらわなきゃ」

「ノブレスオブリージュってヤツですか？」

「そうよ。ましてや私達は王族。貴族よりも多くの義務が伴うわ」

指揮官はほう、とクイーン・エリザベスの姿勢に感心しながら同意をする。

「なるほど、では、私も陛下の面目を潰さないためにも努力しなくてはいけませんね」

「日頃の業務でそれを果たしなさい。今日は余暇よ。思う存分楽しみなさい」

「心からの配慮感謝いたします」

「いいのよ。さあ、受付は済ませてあるわ。着替えてコースへ行くわよ」

クイーン・エリザベスは言いたいことを言い終えたのか、スタスタと施設の中へと歩を進める。

それを確認するとイラストリアスは指揮官に耳打ちをした。

「指揮官さま、陛下はあのようにおっしゃっていますが、指揮官さまの

こと非常に評価してるんですよ」

「そうなのか？」

意外なものと感じた指揮官は少し驚く。

「もちろんですわ。でなきや今日のような催しに呼ぶはずもないじゃないですか」

「確かに、それもそうか」

「2人ともー！何話してるのー！はやくしなさい！！」

2人が何か話していることに気づいたのかクイーン・エリザベスは2人を急かす。

「さあ、指揮官さま着替えに行きましよう？陛下が待っていらっしやるわ」

「確かに、待たせては今回の主催者に失礼だからな。行こうか。」

クイーン・エリザベスに追い付くよう、少し駆け足で2人も施設の中へと向かっていく。

場所は変わってコースへ入る。

青々とした芝が広がり、空も雲一つない快晴。そして芝の奥行きを強調するかのようにコースに沿って植樹された針葉樹と広葉樹達。

爽やかな風が吹き抜けるコースは非常に清々しいものである。

18ホールの一番初めである第1ホールに参加者は並んでいた。

まず、主催者たるクイーン・エリザベス。ピンクを基調としたゴルフウェアに身を包み、サンバイザーをつけ、髪もゴルフがしやすいよう後ろに束ねている。

イラストリアスもクイーン・エリザベスと同様ではあるが、ミントブルーとホワイトを基調とした装いである。

そして、ゴルフウェアは動きやすくするため体のラインが非常にしやすい。イラストリアスのようなメリハリのある体つきは紳士諸氏の眼を奪う。しかし、決して下品なわけではなく整った美しさがあ

クイーン・エリザベスはイラストリアスには体つきのメリハリに関してには劣るが非常に均整のとれたスタイルであり、健康的でありながらも眼を奪われる美しさがある。

そして、指揮官は上は黒に青いラインの入ったポロシャツ。下は藍色のベルトに黒の差し色が入った白い七分丈のパンツを履いている。

日頃、書類業務に追われてるにもかかわらず鍛練は欠かしていない体つきがゴルフウェアの上からも明らかだった。

張りがある大胸筋、引き締まった大腿筋にヒラメ筋。

古代ギリシアからローマにおける大理石の彫刻を思わせる無駄のない体つきだ。

それぞれの姿を見て三人は思った

(「これゴルフに集中出来る?」)

三者それぞれ魅力的な姿をしていることに加え、ゴルフは相手のプレーをキチンと確認し、誉めるときは誉め、フォローするときにはフォローしないといけない。

つまり、常時異性としても同性としても魅力を感じる体を見ざるをえないのだ。

クイーン・エリザベスは瞬時に考えた。

ゴルフを楽しめ、かつ、ゴルフに集中するために何かゲームを儲けなければならぬと。

接待ではない。このゲームに参加者全員が集中するというルールが必要だと。

そうしなければ、グダグダして終わる。労いもへつたくれもなくなる。

そして、クイーン・エリザベスは考えをまとめ、提案をした。

「2人ともゲームをしましょう」

それぞれの美しさに意識を奪われていたクイーン・エリザベスを除く2人はその声に目が覚めて。当然のことを思う。

「ゲームですか?」

「そう、ゲームよ。ゴルフを全力で楽しむためにもね。2人とも意識がゴルフとは別のところに向けられてたでしょ?それじゃ今日の催

しは台無しだわ。だからよ。」

「なるほど、名案ですわね」

2人とも意外にも乗り気であった。

クイーン・エリザベスは続ける。

「それで、ゲームとは何をするんです？」

「ゲームに出場する全員に対して勝者が望むものを賭けてもらうわよ」

「なるほど。勝者1人に全員から贈り物があるということですか」

「その通り。因みに相手に肉体的損傷を与えなければ望むものに基本大きなルール違反はない。許容範囲を超えるかどうかは第3者にやってもらおうわ」

「誰にやってもらいますか？」

イラストリアスは疑問を投げ掛ける。

クイーン・エリザベスは少し考え、

「そうね、フッド辺りにでもやってもらおうかしら。ベル、通信機を用意して」

そういつて手をたたくと瞬時に白を基調とし、ラベンダー色の差し色が入ったゴルフウェアを着たベルファストがクイーン・エリザベスの隣に現れる。

「お持ちいたしました」

「ん、ありがとうございます」

ベルファストとはどこからともなく通信機を出した。

クイーン・エリザベスはすぐに連絡をとりはじめた。

指揮官は少し違和感を感じ、問いかける。

「ん？ベルファスト。どうしてメイド服ではなくゴルフウェアなんだ？」

「申し遅れました。ご主人様、今回私もキャディー兼プレイヤーとして参加するよう陛下から仰せつかっておりました。」

指揮官は少々驚き、疑いを賭けているわけではないがクイーン・エリザベスに問う。

「そうなんですか、陛下？」

フツドとの話をすぐに終えたクイーン・エリザベスは通信機をベルファストに渡し、指揮官に答える。

「ベルの言うことは本当よ。ベルの労いもしてあげたくてね。ベルはこれでも結構ゴルフが好きなのよ」

「ほう、それは初耳ですな。陛下の従者を配慮にも感服いたします」

「世辞はもういいわよ。これから勝負するんだから。さて、じゃあそれぞれ参加者から貰いたい景品をフツドに伝えなさい。そのあと書いたものを全員に発表するから」

「初めに発表するんですか？」

「そうした方が全力出せるでしょ？さあ、許される限りの欲しいものを書きなさい」

参加者各々欲しいものをフツドに連絡をとりながら、書き出ししていく。

そして、全員が書き出すまでもの5分もかからなかった。

その紙をベルファストの代わりに近くで給仕を行うダイドーに渡す。

それぞれの紙を確認してるダイドーは少し表情をひきつらせた。

クイーン・エリザベスは少し疑問を覚えたがゲームを始めない限りには何も起きない。

とりあえず、一抹の不安を抱えつつ続行することにした。

「じゃあ発表するわよ」

ダイドーは書き出したモノを公表する。

参加者4人はそれに近づき各々確認をする。

内容は下記の通りだ。

クイーン・エリザベス

イラストリアス↓高級茶菓子 一ヶ月分

ベルファスト ↓秘蔵の紅茶（客人用）一ヶ月分

指揮官 ↓一日デート

イラストリアス

クイーン・エリザベス↓秘蔵の紅茶 一ヶ月分

ベルファスト ↓お茶会の茶菓子増量

指揮官

↓貞操と子供

ベルファスト

クイーン・エリザベス↓キャ○ウェイ最新ゴルフクラブセット

イラストリアス ↓一週間秘書交代

指揮官 ↓貞操と子供

指揮官

クイーン・エリザベス↓秘蔵のウイスキー

イラストリアス ↓自由時間の拡張

ベルファスト ↓休肝日の削減

クイーン・エリザベスと指揮官は顔がひきつった。

ダイドーが顔をひきつらせたのはこれだったのかとクイーン・エリザベスは思い返した。

そして、頭を抱える。日頃の行いもロイヤルとしては少し目に余るから仕方もないイラストリアスはまだしも、信頼し、労おうとも思っていたベルファストまでこの様だ。

ましてや、その最たる負担を強いるのが、労いで招いた指揮官であれば尚更だ。

自分の浅はかな行動を悔いるに加え、フツドならここまで過激なことは許さないだろうという過信に後悔を覚える。

「ちよつと待て。これ許されるのかよ」

思わずいつもの口調が指揮官から出た。

そりや動揺するわ、とクイーン・エリザベスは心の中で思う。

「出ちやいました♥?」

「出ましたね♥?」

当事者達な何も後悔してない。むしろ、嬉々とした表情で答えている。戦いが始まってすらいなのに勝者の表情をしている。

「お前ら淑女だろ。欲望駄々漏れじゃん、本当に淑女なのか?」

あまりにも衝撃的な為、指揮官はイラストリアスとベルファストに詰め寄るが、2人とも何も間違っていないと自信満々の表情である。

「(色んな意味で)ごめんなさい下僕。下僕と私の願いがスゴく可愛いものに思えるわ…」

「陛下、陛下は何も間違ってます。いや、ほんの少しでも良識があれば陛下のような要望になります。ええ、コイツらが悪い」

クイーン・エリザベスはあまりの失態に頭を下げるが、指揮官は慌ててフォローに回る。

それを余所にイラストリアスとベルファストは

「あらあら、指揮官さま心外ですわ。私にも良識はありますのに」

「その通りでございますご主人様。本当は○○○○や*****」

「**でも良かったんですが…」

「ベル、これ以上やめて。ロイヤルの品位を疑われるわ」

クイーン・エリザベスは若干涙目になりながら2人を静止する。

「これ維持でも勝たないといけないヤツじゃん。うちの基地大荒れするぞ。」

「本当にそれは良くないわね…何としても勝ちましょう」

指揮官とクイーン・エリザベスはあの暴徒2人を鎮圧するために結託し、

「ベル、真剣勝負よ。指揮官さまの貞操と子供を賭けたね」

「ええ、決して負けませんよイラストリアス様」

暴徒はスポ根漫画におけるライバル同士のように熱い対抗心を燃やしていた。

かくして、勝負の幕は切って落とされた。

ゴルフのルールが分からない諸氏も多いためゴルフのルールを少し説明をしよう。

ゴルフはポイントを争うゲームだ。某ゴルフゲームを少しでもやったことある人は分かるであろう。

そしてポイントは少なければ少ないほど良い。

例えると+1より0、0より-1の方が成績が良いのだ。

ゴルフはホール、コース毎にPARの数が変わる。

PARが4なら4回球を打って穴に入れることが出来ればポイントは±0ということになる。

PAR4で5回打って入れば+1ポイント

PAR4で3回打って入れば-1ポイントとなる。

少ない打数で入れれば入るほど良いのだ。

全18ホールを回ったあと、総合ポイント数によって勝者が決まる。

第1ホール（PAR4）

第1打 クイーン・エリザベス

クイーン・エリザベスは固い信念を抱いている。

ロイヤルの、そして基地全体の秩序のために勝たねばなるまいと。勝利のあかつきには甘味やお茶、そして指揮官とのデートがあるが、某2人のせいで勝つ理由が変わった。

ロイヤルのトップとして勝たねばなるまい。そしてロイヤル陣営に今後似たようなことを表だつて起こさないよう、秩序を改める必要がある。

クイーン・エリザベスは礼を参加者にしてフィールドに入る。

信念を持ちつつも心を落ち着け1番ドライバーと球に意識を集中させる。

スパン！

小気味いい音が響く。

球は空に吸い寄せられるかのように真っ直ぐ飛んでいく。

「ナイスショットー!!」

外野から声がかかる。本当にナイスショットだ。

素人から見ても美しく真っ直ぐ飛んでいる。

ボールは第1ホールの3分の2ほど進んだフェアウェイに乗った。

「文句無しのナイスショットでした陛下」

「ええ、素晴らしいショットでしたわ」

「流石陛下です」

お世辞抜きに3人は感銘を受けていた。

クイーン・エリザベスはやはり嬉しいのか照れ臭そうに言う

「ええそうでしょう、私にとっては造作もないことだけど。さあ、ゲームは始まったばかりよ。次は下僕の打席でしょ。いってきなさい」

「では、失礼して」

指揮官は（色々な意味で）負られないと闘争心を燃やし、打席に入

る。

体調は万全。あとは集中力を掛けさせずにいつも通りにやればいい。大きく深呼吸をして。ドライバーを振り上げ…

スパン!!

先ほどと同様に真っ直ぐ飛んでいく。クイーン・エリザベスのモノとは違い力強い一撃によって飛ばされている。

「ナイスショット!」

こちら先ほどと同様に外野から声がかかる。

低弾道ながらどんと距離を伸ばしていき、球が停止したのはクイーン・エリザベスよりも5ヤードほど先の場所だ。

確認した後、打席を離れるとクイーン・エリザベスが近づいてきた。

「良くやったわね下僕」

「ええ、この勝負負けるわけにはいかないんでね」

「その意気で頑張りなさい。私達の秩序のために」

「了解しております。陛下も御武運を」

「ありがとうございます」

軽くお互いの意思を交わし2人は残り2人の第1打を見る。

「よろしくお願ひしますね」

イラストリアスは軽く会釈し打席へ入っていく。

イラストリアスは勝利を確信している。このゴルフで勝利し、指揮官の寵愛を確実に己のモノにしようとしている。

もう少し後に外堀を埋めてからの予定だったが、このチャンスは逃すわけにはいかない。

スパン!

小気味いい音で飛んだがボールは左にそれる。

「ああ…やってしまいましたわ」

勝ちたいという思いが先行しすぎた。

それが普段のプレイスタイルを崩し、当たり所が僅かに逸れた。何とか球はフェアウェイ上だが、すぐ隣はラフである。

「珍しいわね」

「ああ、本当に珍しい」

「あのイラストリアス様が第1打で軽いミスをするなんて」

3人は驚愕していた。イラストリアスは指揮官やクイーン・エリザベスとも基地の付き合いは長く、ゴルフに行く回数もある程度あった。ベルファストはキャディーとして彼女のプレーを良く見ていた。

そのプレー中では第1打目は確実に誰よりも美しく真つ直ぐに飛ばしていた。彼女は1番難易度が高いとされるドライバーを得意としていたのだ。

その彼女がミスをした。

これは、彼女が心を乱すほどに勝利を渴望していることを意味する。

もし、これが相乗効果でプレーにうまく働いたら、優勝は彼女になる可能性が十二分に考えられる。

イラストリアスの本気度を3人は悟った。

クイーン・エリザベスと指揮官は更に不安を感じた。

もし、今のプレーを見てベルファストのゲームに臨む姿勢が変化したなら…このゲームは一瞬のプレーに対する油断が敗者への一方通行路となる。

クイーン・エリザベスと指揮官は油断はすることはなかった。むしろ、今まで以上に真剣に望んであのショットだ。

結果は伴っている。だが、まだ第1打。序盤も序盤だ。

これからどんなどんでん返しが起きてもおかしくはない。

2人は戻ってきたイラストリアスに労いの声をかけつつも、打席に入ったベルファストの様子を見守る。

2人の不安は的中してしまう。

スパアン!!

ベルファストは指揮官よりも力強い音を立てた。それは決して当たり所が悪いために発せられる音ではなく、ドライバーから球に伝わる力がかなり強いことを感じさせる音である。

その音の通りに球はまっすぐ長く飛んでいく。

「ナ…ナイスショットー!!」

あまりにも上手くいつているショットを受けて思わず声を出すの

が遅れてしまう。

球は誰よりも遠くへ落ちた。その距離、グリーンまでおよそ80ヤード手前。現段階で最もホールに近い。

ベルファストは満足した表情で打席から戻ってきた。

「ベル、本当に良いショットだったわ」

「お褒めに預かり光栄でございます陛下。私としてもかなり良いショットでした」

「確かに良いショットだったわね。私も負けていられないわ」

「あんなショット久々に見たよ」

「ふふ、そこまで褒められると少し調子に乗りそうですわ」

軽い会話を交わしながら全員はゴルフカートに向かう。

その途中で指揮官にベルファストが近付いてくる。

「ご主人様、待っててくださいね。完膚なき勝利をおさめさせていただきますわ」

指揮官の耳元でそう囁く。指揮官は予想だにしない勝利宣言に、ベルファストの方向を向く。

ベルファストは妖艶にして余裕の笑みを浮かべている。

指揮官はベルファストを睨み付け

「そう余裕でいられるのも今のうちだ。まだ勝負は始まったばかりだ」

威圧の言葉をかける。しかし、ベルファストは動揺するどころか恍惚とした表情を浮かべ

「良い表情ですわ、ご主人様♥？ええ、その挑戦的な姿勢がいつまで続くか楽しみですわね」

そういつてゴルフカートの運転席に乗り込んだ。

指揮官は強がったものの、不安に駆られていた。

実際、ベルファストは勝利への渴望を力に表した。

ただ、勝利を掴ませないよう動くだけというのは守りの姿勢である。

戦争において防衛は攻撃に勝つことはない。

攻めの姿勢こそが劣勢を覆すきっかけになるのだ。

防衛の姿勢を示していたクイーン・エリザベス、指揮官に対して攻勢をかけたベルファストは初撃で2人への優位を確立した。

イラストリアスのミスが思わぬ方向で2人に作用したのもベルファストの優位に大きく影響した。

指揮官は冷静に分析し、このままでは敗北が確定することが分かった。

ベルファストに対し、イラストリアスはライバル心を燃やし、これからのミスは望めない。

クイーン・エリザベスはベルファストのショットに多少なりとも動揺をしている。

この事を鑑みて現時点で指揮官とクイーン・エリザベスのどちらかが勝てる勝率は3割程度。

勝率の低さは、技術がほとんど拮抗してる中での防衛戦と攻撃戦というモチベーションの差が大きい。

指揮官は、どこかで勝てる要素を模索しなくてはならない、と不安に煽られながらも第2打を打つためゴルフカートに乗り込んだ。

ロイヤルとゴルフ

後編

第1ホール 第2打目。

ここからの順番はグリーンから最も遠い人から打つことになる。
イラストリアスは3番のフェアウェイウッドを取り出す。

その間にボール位置が近いクイーン・エリザベスと指揮官は各々使うであろうクラブ複数持つて自身のボールの位置へと移動する。

イラストリアスはベルファストからプレッシャーを感じた。

指揮官への寵愛を欲する者同士だが第1打で成功と失敗という対極の立場になった。

自身の指揮官に対する愛が足りないのでは、とも一瞬思った。しかし、そんなことはない。指揮官と歩んだ時間は空母の中で最古参である。指揮官の良いところも悪いところも基地の誰よりも知っている。先程のミスは気持ちが先行しすぎた結果であると結論付けた、自身の優位性を抛り所にし、油断をしなければ何の問題はない。

するとどうだろうか。ベルファストに対してプレッシャーは感じた、それが不思議と不安に直結はしなかった。むしろ、闘争心と自分への自信になった。原因は理解できていない。

だが、今はベストなショットが出来る。そんな自信が生まれていた。

イラストリアスはグリーンへ向けて3番を振り抜く。

Spanien!

打球はぐんぐん延びていく。

横風が吹いていたが、良い方向に作用して球はピンから3ヤードほど離れたグリーンへと乗った。

イラストリアスが抱いた直感は間違っていないとの証明になった。

「ナイスショットですわ、イラストリアス様」

ゴルフカートから見えていたベルファストに声をかけられる。

「ありがとうベル。たまには直感も信じてみるものね」

イラストリアスは満足そうな微笑みを浮かべている。

ベルファストはそのイラストリアスの表情を見て安心を抱いた。

恋敵だが、相手のコンディションが悪い状態で勝ったところで心に完全なる諦めをつけさせることはできない。いつ、隙を見つけて逆襲をしてくるか気が気でなくなる。それは指揮官に全力の愛を注ぐことが出来ないことを意味する。

だからこそ、恋敵とは全力で闘い、勝利したいのだ。

もし、仮に、万が一、自分が敗北することがあつたとしよう。それが全力で挑んだ勝負であれば諦めがつく。

それがベルファストの恋に対する戦争論である。後味の良い濃密さなのだ。

だから、このゴルフの勝負もイラストリアスやクイーン・エリザベス、指揮官にも全力で勝負し勝利をおさめたい。

ベルファストは基地の中でも上位に位置する武人氣質だ。

完璧な勝利にこだわるが、決してそれが逆手には取られない豪傑なのだ。だからこそ、基地への配属が最古参勢であるイラストリアス相手にも劣らないという自信がある。

所変わってクイーン・エリザベス

華麗なまでのイラストリアスのショットに感心する。

ミスを引きずらないで2打目でフォローを成功させた。同じロイヤルのKAN—SENとして誇らしく思うが、決して負けられない。

この勝負はロイヤルの秩序、基地の秩序を維持するためにも絶対的にクイーン・エリザベスもしくは指揮官の勝利が必須なのだ。

ましてやクイーン・エリザベスは誇り高い王家の出身である。

勝負事において決して遅れを取るわけにはいかない。

気高く誇り高くあらねばならない。そう生きてきた。

だから、完璧な勝利を遂げる。それが王家として臣民に見せるべき姿である。達成しうる実力も備えてる。ベルファスト、イラストリアスに拮抗することはあれど決して劣ることはない。

その根拠のある自信と誇りを胸に今すべきことは、確実に4打以内におさめることだ。

実現可能性が限りなく高く、負けることはない。最下位にはならない。

勝利に固執することは余計な力を生み出す。そして、無駄に体力を消耗する。これがクイーン・エリザベスの持論である。

実際、イラストリアス、ベルファストのコンデイションは今までにないほどに素晴らしいものだ。言い換えるならば、未知の領域、どの程度の燃費かも把握できていない。

不確定要素が多すぎる。最大の弱点はそこにある。ならば、下手に現段階で勝負に出て要らないミスを招くわけにはいかない。

だからこそ、確実に己の実力の範囲内での最善策を取る。

確実な勝利への布石を敷くために。

クイーン・エリザベスはフェアウェイウッドよりも得意であるユーティリティを持ってきていた。

確実にグリーンへと近付けるため、そしてあわよくばグリーンに球を乗せるために。

спан！

「ナイスショット！」

近くの指揮官が声をあげた。

クイーン・エリザベスの打球は狙いどおりに、狙い以上の所に落ちた。グリーン・エリザベスの端だ。あわよくばという場所に落ちた。

あとはパターでいかにカップに近付けるかどうかである。

一回で入れる必要はない。確実な勝利を手にする布石は確実に敷けている。クイーン・エリザベスの表情は気高く誇らしい笑みを浮かべていた。

指揮官は焦っていた。他の皆は調子が良い。自分はどうかだろうか？決して悪いわけではないが周りから比べるとそうでもない感じだ。果たしてこの様で勝利を引き寄せるためのショットは打てるのだろうか？

いつになく心が乱れていた。あの景品、周りのコンデイション、勝たなければならぬプレッシャー。決して仲間を失うことはないにしろただならぬ緊張感を持ってしまふ。

3番アイアンを持つ手が震える。全く集中できていない。このまま打てばボールは思わぬ方向に飛び、ペナルティになる可能性が高い。しかし、緊張が解けない。それが更なる焦りを生み、体がより強張る。

いつもらしくない、一旦深呼吸をしよう。

指揮官は深呼吸をした。身体の中に新鮮な空気が入ってくる。

コースを包む芝生と土、周りを囲う木々それぞれが調和し雄大な印象を抱く香りが身体を駆け巡る感覚がする。

少し頭がスッキリしてきた中で、ふと思った。

勝敗関係無しにゴルフを楽しんだ方が良くないか？

思い返すと、軍上層部の中で開かれたコンペでも変に畏まらない方が成績は良かったし、周りからのウケも良かった。

むしろ、気張った方が参加者達に迷惑をかけたし、気を遣わせていた。

最悪のパターンだ。自分も楽しくない、相手も楽しくない。

最善策の自分も相手も楽しい方で成功してきたじゃないか。

じゃあ今回はどうだ？自分は楽しくない。相手は？楽しくないかもしれない。真剣勝負だ。

相手を変えるのは難しい。ならばどうする？最悪のパターンではない悪いパターンに変えればいい。

それは、自分は楽しい、相手は楽しくない（もしくは分からない）パターンだ。

それであれば、良い成績になるかもしれない。不確定要素の多い経験則になるがこの場合仕方ない。

こちらの手数は限られており、相手は未知の実力を発揮してる。だからこそ、少しでも自分にとって良い流れを作れば良いだけだ。

だったら、楽しむしかない。そうしなければつまらない。

この際、寵愛だろうが貞操だろうが子種だろうがくれるもんはあげる覚悟でやってやろうじゃねえか。

指揮官は吹っ切れた。だからこそ、緊張も解けて手の震えもなくなった。

指揮官は自分が得意とする3番アイアンを振り抜いた。

「ナイスショットよ！」

クイーン・エリザベスが声をかけた。

打球はぐんぐんとピン目掛けて飛んでいく。追い風も作用してより一層遠くへ行つた。

球はグリーンに着弾しコロコロ転がっていく。

奇跡が起きた。

ボールがカップの中に入ったのだ。

遠いために見えてはいない。参加者全員は指揮官の球はグリーン
のピン側にあると思っている。

ゴルフカートが来るまで指揮官はキャップの鍔を掴み遠くを見据
えていると、後ろからクイーン・エリザベスが声をかけてきた。

「かなり良い打球だったわね」

「お褒め頂き光栄です陛下。私の中で1, 2を争う位良いものでした」

「確かにあれは誇って良いぐらいのモノね」

「陛下の打球も素晴らしいものでしたよ」

「私にとってはいつも通りだけどね」

「安定していることは本当に優れていることですよ」

「ありがとう」

2人が談笑していると後ろからカートに乗ったベルファストとい
ラストリアスが来た。

「指揮官さま素晴らしい打球でしたわ」

「流石ご主人様ですわ、私も負けてられません」

「2人ともありがとう。さて、次はベルファストが打つ番だろう。私
が運転するよ」

「そうでしたわね。ですが、ご主人様にお手を煩わせるわけには…」

「気にするな。ファストプレーがゴルフマナーの1つだろ？たまには
他人に甘えな」

「…そうですわね。ご主人様、お言葉に甘えさせて頂きますわ」

「お任せくださいお嬢様」

全員の余裕が出たのか軽口も出るようになってきた。

ベルファストの打球の近くまでカートを動かした。ベルファストは7番アイアンを取り出し、球の近くまで行く。

ベルファストは一回深呼吸をしてすぐに球を打った。

球はきれいにグリーンへと飛んで行き、ピン側に落ちて止まったようだ。

全員がグリーンに球が乗ったのでグリーン目指しカートを動かす。

「今日は皆調子が良いわね」

「そうですね。私は1回目少しミスをしてしまいましたけど」

「あんなのミスの内に入らないさ」

「そうですね、イラストリアス様。結果全員グリーンに2打で乗って
るではありませんか」

「それもそうですね」

軽く談笑しているとグリーンに近付いてきた。

カートを一旦止めて、ピンから最も遠いクイーン・エリザベスが
真っ先に降りた。続いて、イラストリアスとベルファストが降りる

「さて、パターに移りましょうか。下僕、カートを駐車エリアまで動か
しておいてね」

「かしこまりましたよ」

「その間、ご主人様の球を探しておきますね」

「ありがとうございます」

全員がパターを取ったのを確認して、指揮官はカートを停車位置ま
で動かした。

ベルファストは自分の球を見つけ、マーカーを置くと指揮官の球を
探しはじめた。

しかし落ちたと思われる場所をいくら探しても見つからない。

「…?おかしいですわね」

ベルファストはイラストリアスやクイーン・エリザベスのライン上
に入らないよう配慮しながら探す範囲を広げる。

しかし、見つからない。ベルファストが探しているとカートからグ
リーンへと指揮官がやってきた。

「ベルファスト、見つかったか?」

「申し訳ございません、ご主人様。それがまだ見つからないのです」

指揮官はあまりにも見つからないのに疑問を浮かべる

「落ちたのここら辺だよな」

「その通りでございます。ですが、見つからなくて…」

「ここだと変なところには行かないはずなんだが…」

2人は首を傾げる。落ちたらしき場所には一切ない。

「…まさか」

何かに気付いたのかベルファストはピンの方向へ向かう。

指揮官の打球はカップに入っていた。

ベルファストは指揮官を呼ぶ。

「ご主人様！…ございましたー！」

「おい、嘘だろ…」

指揮官はベルファストに向けて駆け寄ってくる。

「イーグルでございます」

ベルファストは微笑みを浮かべ、小さく拍手をする

遠くからパットのラインを確認していたイラストリアス、クイー

ン・エリザベスも近付いてきた。

「どうかされましたか？」

「2人ともあちこち探し回ったと思ったら急に立ち止まって。なんか

あつたわよね」

「陛下とイラストリアス様。ご主人様はイーグルですわ」

「!?!」

「ああ、私も信じられてないがベルファストが球をホールの中で見つけてくれた」

イラストリアスやクイーン・エリザベスどころか決めた指揮官本人ですら動揺している。

バーディやパー、ボギーに比べイーグルはなかなか決まることがない。むしろ、決まれば奇跡とも言える。技術があっても出来ないことの方が多いのだ。

「じゃあ現時点で1位は下僕ということね」

「そうなりますわね」

「現時点で―2の差ですか…細々と詰めるしかありませんわね」
パットが残っている3人はそれぞれの場所へ移動をしてパターをはじめ、第1ホールの結果は以下の通りだ

指揮官 ―2

ベルファスト ―1

イラストリアス ±0

クイーン・エリザベス ±0

その後、第1ホールの白熱した形は霧散し、いつも通りのゴルフに戻っていった。

そして前半が終わったときの結果は以下の通りだ

ベルファスト ―2

指揮官 ―1

クイーン・エリザベス ±0

イラストリアス +1

前半を終えて、休憩に入る。

ゴルフは基本的に前半9ホールを終えた後、休憩ということでご飯や飲酒を挟む。

そして、後半に挑むのだ。その後グダグダになることが多い…

「…カート乗ったら吐くかも。ゴメン、歩いていく…」

「下僕、飲みすぎよ…」

「指揮官さま…打ち終わったら私も歩きますので…肩を貸してくださいませんか…」

「イラストリアス様…」

「ベル…ヴィクトリアスとフォーミには内緒にしておいてね…」

2名やらかしている。

休憩に2人だけで黒ビール6杯とワイン2瓶を飲めばそうもなるだろう。端的に言ってこの2人長く一緒にいるだけあって行動もかなりそっくりである。

アホな部分は特に。

クイーン・エリザベスは指揮官とイラストリアスに問う

「あなた達負けたらどうなるか分かってるでしょ？特に下僕」

「…はい」

「…はい」

「そのままだと負けるわよ」

「…はい」

「…はい」

「下僕に至っては、骨の髄まで精気吸われるわよ。ベルに」

「陛下、流石にそこまではしません」

「いや、ベル、あなた前科あるからね。否定できる要素どこにもないのよ」

「前科ではありませんわ陛下。未遂です」

「未遂でもやらかしてやるじゃないの、大して変わらんわ」

「…やっぱり、わらくしが勝たないといけらいですわね」

「そんなお酒でボロボロになってる貴女のどこに勝つ要素があるのよ…」

「やはり、私が完全なる勝利を…」

「…出来るものならやってみなさいな」

クイーン・エリザベスがただただ呆れて後半がスタートした。

案の定クイーン・エリザベスとベルファストは安定してシヨットを放ち、指揮官とイラストリアスはズタズタのボロボロであった。

結果

クイーン・エリザベス — 2

ベルファスト — 1

イラストリアス + 18

指揮官 + 18

当然と言えば当然の結果だった。

クイーン・エリザベスは勝利したのに釈然としない表情をしながら周りを見ている。

「ああ…キャ○ウェイのゴルフセットとご主人様の寵愛が…」

まあ、ベルファストは全力で戦ってた。休憩でお酒を飲んでもいいのに飲まずにゴルフに集中してた。

問題は残りの2人だ

「酒さえ飲まなければ…イーグルっていう最高のスタートだったのに…」

「お酒を飲まなければ、逆転のチャンスはありましたのに…」

多少酔いが覚めた2人が嘆いている。

クイーン・エリザベスは思った。2人揃ってアホとしか言いようがない。本当のアホである。仕事をやってる姿が想像できないくらい今はアホである。

勝利は勝利だとしてもアホ2人を見てるとにわかには喜べない。

というか、喜んだこっちが恥ずかしい。

なので淡々と告げる

「とりあえず、下僕日程調整しておきなさいよ。デートなんだから」

「かしこまりました…男に二言はございません」

「ベルとイラストリアスは次のお茶会までにモノを用意しておきなさいね」

「分かりましたわ」

「かしこまりましたわ陛下」

3人が返事したのを確認してクイーン・エリザベスは終幕の言葉を続ける。

「さて、今回のゴルフは終了。シャワー浴びて帰るわよ」

その言葉に従うかのごとく全員が建物の中へと入っていく。

今回のゴルフコンペはクイーン・エリザベスの勝利で終了である。

「さ、指揮官さま入りませうか」

「何してんのよアホ。貴女はこっちでしょ」

「イラストリアス様……」

指揮官と正月

正月

新年をお祝いする行事である。

どの国も共通して新しい年のお祝いはする。

東煌は旧正月を盛大に祝う傾向にあるが、正月もキッチンと祝う（指揮官調べ）

これはある基地の正月の様子である。

0900 基地内大宴会場

「えー、この基地所属のKAN—SEN達。そして、正月に不運にも当直になってしまった諸氏を労うための会にお集まり頂きありがとうございます」大宴会場の床の間の前にて指揮官がズラリと並んだ皆の前でマイクを片手に淡々と話す

周りからは指笛やら歓声やらが響く。

忘れてはいけながここの基地は前線である。フロントラインである。ドールズも少女も銘打ってないが、前線でフロントラインなのである。

無論この事も上層部には内緒である。無論、参加者の中に裏切り者が出れば、それ以外の者により私刑が発生するであろう。

それぐらい団結している。

「気持ちいいぐらいの反応ありがとう。新年から仕事なんてやってられないから今日は楽しく食べて飲んでいきましよう」

すると、指揮官は黄色いヘルメットを被り

「整備班！各机の上の指差し確認！」

「酒、お節、確認、ヨシ！」

各机が並ぶ列にいた当直の整備班員が指差し確認を行い、ヨシ！と言ったと同時に現○猫と同じポーズを取る。

指揮官も同様にポーズを取る。周りからはクスクスと笑いが聞こえてきた。指揮官は満足して言葉を続ける

「確認ヨシ！では、これより飲み会を始めます！！かんぱーい！！」

かんぱーい!!!と宴会場に集まった全員の声が響き渡る。

各々グラスに注がれた飲み物を飲み、机に並べられたお節を食べはじめ。

「えー、ご飯が足りない人は宴会場の後方にて各陣営の料理がbuffet形式で並んでいるので勝手にとって食べてください。並んでる分しかないのです、それ以上食べたい人は名乗り出てください。各自対応します。お酒も同様です」

連絡事項を伝えて指揮官も自席に戻る。

隣には初老の重桜出身の男が座っていた

「お疲れ様です指揮官殿」

「いやいや、整備班長殿こそご協力ありがとうございます」

どうぞ、とビールを勧められるままに指揮官は自らのコップにビールを注いでもらう。

「対して協力なんぞしていませんよ。うちの班員も全員喜んでやりますから」

「すぐく助かりましたよ。このお礼はまた別の機会に…」

「いやいや、お礼なんていらんですよ。この会に呼んでもらったんですから…」

「ですけど…」

「あんまりしつこいと女に嫌われますぜ、指揮官殿」

「それもそうですね。分かりました、私からお年玉ということでおーい！明石ー！」

指揮官は明石を呼ぶ。

この指揮官、読者諸氏はそろそろ気付いているであろうが、恩はキチンと返すタイプである。どんな手を使っても。

「指揮官呼んだかにや？」

ととととととジュース瓶を片手に明石がやってきた。

指揮官は整備班長のとなりに座っていた整備班員とアイコンタクトをとった。

整備班員は意図を理解して整備班長の隣の席を空け、明石をそこへ誘導する。

「さっ、班長殿無礼講ですから、明石と語り合ってくださいな。何やら積もる話があると伺いましたね」

整備班長は指揮官の言葉に冷や汗を流す。何か不利益が発生すると思っただからだ。

しかし、結論は違った。指揮官は整備班長に耳打ちをする

「聞いた限りだと、我が基地に多大な利益がありそうですね。予算はつけておきましょう。是非とも頑張っていたいただきたい」

そう言っ明石を整備班長の横に据えて

「じゃあ、明石をよろしく頼みますよ」

と一言整備班長に声をかけ離れていく

指揮官はKAN—SENを労おうとフラフラ宴会場をコップ片手に歩いていると

「指揮官」

鉄血陣営の面々が固まっているエリアから、白銀の髪を携えた薄幸の戦艦に呼び止められた

戦艦テイルピッツ。鉄血陣営を率いる戦艦ビスマルクの姉妹艦である。

指揮官を呼び止めたテイルピッツの表情は少し曇っていた。

「どうしたテイルピッツ」

何かを察した指揮官はテイルピッツに何があつたのか詳細を尋ねる。良くないことだというのは分かっていた。

「オイゲンがいつの間にか重桜の酒とロイヤルのウイスキーをそれぞれ一本ずつ飲み干した挙げ句、宴会場から出ていったわ…。嫌な予感がするの…」

物憂げな表情でテイルピッツは語る。

冷や汗が流れる。絶対ロクでもないことになるかと瞬時に察した。

「テイルピッツ、オイゲンはどっちの方向に行った?」

「指揮官の執務室の方よ」

「Schheisse!!!」

テイルピッツはビクツとした。突然指揮官が大声をあげたからだ。

指揮官が思わず鉄血の言葉で悪態をつくには理由があつた。

指揮官にはオイゲンの目的が分かったからだ。オイゲンも所謂古参と呼ばれるべきメンツである。

なので、執務室に何かがあるかも知っている。オイゲンは持つてる酒だけでは飽きたらず、執務室にある秘蔵酒を取りに行ったのだ。

宴会場に並んでいる酒も決して安酒ではないが、執務室にある秘蔵酒とは比較にならない。

それぐらい高価な酒を安酒の如く飲み散らかせるなんぞ、陣営が許そうと指揮官個人が許さない。

指揮官は動揺しているティルピッツを気にもとめずにすぐに執務室の方へ駆け出した。

しかし、時既に遅し

執務室には重桜の21年もの、ロイヤルの青いラベル等のウイスキーの空瓶が転がっていた。

飲みかけであったが、一個一個は高額で取引されてるモノである。

そして、重桜の有名な高級ウイスキーの瓶を抱え着物姿のオイゲンが執務室の床に転がっていた。

「…オイゲン」

「あら〜しきか〜ん。きららのね〜♥?」

明らかに呂律が回ってない。指揮官の頭に血が上る。だが、酒で酔いどれと化したオイゲンは指揮官が激怒していることなどお構い無しである。

「お前、今自分がとんでもないことをしてかしてるって分かってるか?」

指揮官の手にはいつの間にかマチエーテが握られている。

オイゲンはマチエーテの存在に気付いていながら、指揮官を煽る

「ふふふ…もしかして〜、お酒飲んで昂ってきちゃったのかしら〜。無理やり晴れ着を剥がそうとしてるんでしょ〜」

その発言を聞いた指揮官は怒髪天を衝いた。

「ブッコロス!!!」

怒りに任せてオイゲンの脳天に向けてマチエーテを振り下ろしたしかし、KANSENと人である。素の性能が根本的に違う。

オイゲンは片手でマチエーテを白羽取りした。

そして、クスクス笑いながら煽る

「指揮官く、ただの人間がKAN—SENに勝てるわけないじゃない」
「なんだ？試してみなきやあ分からねえだろうが、酔いどれ。寝言はキチンと寝てから言え」

「常日頃から夢見がちな坊やには言われたくないわねえく」

「坊やで悪かったな、白髪ババア」

この発言を聞いたオイゲンは先程までの余裕の表情が消え、眼光が鋭くなる。酒で赤くなつてはいるものの指揮官をまるで射殺すように睨み付ける。

「……あんた。今なんて言った？」

「耳まで遠いときたか。ババアも結構年みたいだな」

2人の間を静寂が通り抜ける。

「…コロス」

「それはこっちの台詞だ」

オイゲンは構える。ボクシングのファイティングポーズである。指揮官は執務室にあった軍刀を鞘から抜き構える。

オイゲンが先に動いた。リーチの差が大きくあるにも関わらず、素早い動きで指揮官の間合いへ突撃していく。

あまりの早さに指揮官は対応できず、懐に入られてしまう。

オイゲンは着物の動きにくさをものともせず、的確に指揮官の顎を狙ったジャブを繰り出す。

指揮官は構えを解き、ジャブを食らわないようにギリギリでかわす。

それを狙っていたように、オイゲンは片手持ちになった軍刀を手刀で落とす。

カランと軍刀は床に落ち指揮官の手元から離れる。

指揮官は軍刀は放置し、徒手の間合いまで来たオイゲンの膝に向けて蹴りを放つ。

オイゲンは足元への意識を怠った為に、モロに攻撃を受けてしまう。

指揮官はその隙を逃さず、今度は同じ膝の側部から蹴りを加える。オイゲンは姿勢を崩し、倒れるが、その勢いそのまま横へ転がり、一旦指揮官と距離を取る。

「少しはやるわね。ちよつと前まではすぐ押し倒されてたのに」
「日々人間は成長するんでね。お前は衰えてるんじゃないか？」
「まだ軽い体操程度よ…!!」

オイゲンは地面に空瓶を指揮官の顔面向けて投げる。

指揮官は思わずオイゲンを視界から外し、避けるが避けた方向へオイゲンが指揮官の脇腹へと蹴りを入れる。

指揮官は受け身も取れず横へ吹き飛ばされる。

「あら？もう終わり？」

オイゲンは煽る。しかし、本人も分かっている。指揮官はこの程度でやられるほど柔ではないと。

その予想は正しく指揮官はわき腹を軽くさすりながら起き上がる。
「んなわけないだろうが。随分と人間相手に卑怯な手を使う。騎士の矜持とやらはないのか？」

「これは戦いよ。手段を選んでるほどかわいいものじゃないわ」

「そりやそうかい。こちらもそのつもりだよ。お前が謝るまで徹底的にやらせてもらうからな」

「子供じみた理由ね」

「お前が安酒の如く飲み干した酒の金額は、子供が聞いたら腰抜かすだろうけどなあ!!」

指揮官は懐から手裏剣を投げ放つ

オイゲンは常人ならできない、手裏剣の持ち手を的確に手甲で弾き、指揮官にとどめを刺そうと拳を握りしめ接近する。

指揮官は畳返しの要領で執務室のフローリングを踏み抜く。

オイゲンは身体をのけぞらせて急停止をかける。それを予想して指揮官は前方のフローリングを蹴り飛ばす。

オイゲンは身体を無理に捻り、木片を回避し床に転がる。

そこに接近し指揮官が踵落としを決めようとした瞬間

「恥れ者が！何を騒いでいる!!」

執務室の扉が勢い良く開かれた。

突然の出来事に動揺し、2人揃って扉の方を見る。

そこには鉄血の航空母艦グラーフ・ツェツペリンの姿があった。

その顔は真っ赤に染まっている。

「テイルピッツに頼まれて、卿とオイゲンの様子を見に来れば…主賓が祝いの席を放置するどころか、労い合う戦友を感情のままに罵り、攻撃し…」

ツカツカと2人へ近づきながら怒りを吐露していく。

「挙げ句には執務室を破壊して…誰にこの事態を収集させるつもりだったのだ!!!後先も考えずに行動しおって!!!」

2人の胸ぐらを掴み目の前で怒鳴り付ける。

2人は先ほどまでの血気盛んな様子が嘘のように黙り込み縮み上がっている。

「…片付けろ」

「…はい?」

「今すぐにここを片付けるのだ!!!」

「ハイ!!」

ツェツペリンから解放された2人はそそくさと執務室の片付けを始めた。

散らかった破片を回収し、穴の空いた場所はテープなどで一時的に塞ぎ、床の穴は周りにカラーコーンをおいたりした。

全てが完了したのをツェツペリンが確認し

「我は宴会場に戻る。2人もすぐ戻ってこい、いいな」

そう言っって執務室を出ていく

残された2人はツェツペリンが出ていったのを確認し、ため息をついて同時に呟いた。

「ツェツペリン、怖…」

重桜と名称

重桜

レッドアックスズ勢力の1つ。

個人よりも和を尊ぶことで有名な陣営でもある。

しかし、今回は何処かおかしい

指揮官は退屈しのぎに重桜寮に向かっている

何やら調理室から話し声が聞こえてくる。

指揮官は調理室の扉の隙間からのぞくと、中には千代田、金剛、比叡、榛名、加古がいた。

何かを話し合っているようだ。

「これは今川焼でしょ?」

「大判焼きでしょう?」

「回転焼きと聞いてますわ?」

「太鼓饅頭では?」

「御座候じゃないんですか?」

非常に厄介な話じゃないかと指揮官は感じた。

かつて、ユニオンで起きたコーラ論争を思い出す。

例のユニオンでのコーラ論争は「シビルウォー オブ コーラ」として何故か記録されている。

ユニオンとしては今後の戒めとして活用するそうだ。

なんの戒めなのかはわからないが…

それを思い出した指揮官は、触らぬ神に祟りなしと考えその場を離れようとする。

「指揮官様♡?こんなところで奇遇ですわ」

聞きなれた愛のある声色が聞こえた。

重桜の空母であり、陣営の取り纏め役の1人。

そして、この基地の古参の1人でもある赤城だ。

指揮官にとっては最悪のタイミングで声をかけられてしまった。

調理室を除いてる様子をバッチリと赤城にみられてしまったのだ

「調理室に何か御用事かしら?」

「いや、たまたま通りかかったら中から声が聞こえてな。気になって少し覗いてみただけだ」

指揮官はおずおずと話す。早くこの場から離れたくてしかたがないのだ

「おおよそ、今日のおやつのお献立について話しているんでしょう。よかったですら指揮官様もおーついかげですか?」

「いや、別にお菓子を貰いに来たわけじゃないから…」

「遠慮なさらなくていいですよ。数は十分にありますわ」

「いや、お腹も空いてないから…」

「では、お茶だけでもどうですか?」

赤城はなんとしてでも指揮官と共に過ごそうとしてくる

そんな風な問答をしてるうちに、調理室から榛名が指揮官達の方へ来た。

「指揮官と赤城さん?こんなところで何してるの?」

「あら、榛名。たまたまいらっしゃった指揮官様をお茶に誘ってたのよ。お菓子も十分にあるでしょ?」

「そうだったんだ。もちろん十分に数はあるわよ」

「榛名もそう言ってますし。遠慮なさらずに指揮官様、さあ行きましょう」

「そこまで言われるとな…わかった」

ここまで言われてしまうと断れない。

しぶしぶ嫌な予感がするお茶の誘いに乗ることにした。

「ささ、指揮官様入ってくださいいな」

「そんな急かさなくてもいいだろ」

赤城に手を引かれ指揮官は調理室へと入る。

調理室にいた千代田と金剛、比叡、加古の4人は皿に置かれた丸い小麦の焼き菓子の周りを取り囲んでいた。

「指揮官と赤城さんか」

千代田があまり興味無さそうに言う

「指揮官が此方に来るなんて珍しいですわね」

「本当ですわ。何か重桜寮に用事でもありました?」

金剛と比叡は少し疑問を感じていることを質問する
「フラフラしてただけだ。偶然会った赤城にお茶の誘いを受けてな。
何やら、お菓子について話し合ってるんだって？」

指揮官は警戒心を抱きつつも聞いてみた。

千代田は少し悩ましがな表情で応えた

「今日のおやつは今川焼きなんですが…」

「ですから、大判焼きでしょうか？」

「比叡、回転焼きですわ」

「金剛姉さん、比叡さん。コレは太鼓饅頭ですよ」

「御座候ですよ、戦艦の皆様」

「御座候って何ですか？」

「確かに、御座候は初めて聞きましたわ…」

「え？」

「どうやらお菓子の名称で少し揉めていたようだ。」

指揮官はそれぞれが違う名称を言うお菓子について違和感を感じ
ていた。指揮官の知っているお菓子の名称と違うのだ。

話し合っている彼女等について聞いてしまった。

「これはおやきだろうか？」

「「え？」」

赤城を含めた重桜のKAN—SEN 6人は驚いた

「指揮官様？…このお菓子はご存知なのですか？」

赤城は恐る恐るで尋ねる

指揮官は不思議なことでもないように答える

「ご存知も何も軍の同期から一回ご馳走になったことがあるよ」

「中身は何が入ってるかもご存知ですか？」

金剛も赤城に続き尋ねる

「もちろんだ。普通はあんこが入っているだろうか？カスタードク
リームやチョコクリームが入っていることも多いね」

それを聞いた千代田、比叡、金剛、榛名は同意する

「今川焼きと同じです」

「大判焼きも同じですわ」

「回転焼きもそうね」

「太鼓饅頭もそうだな」

加古だけは少し驚いている

「御座候はあんこだけなので少し違いますね」

指揮官は不思議そうな表情で

「おやきのことなんだが…」

と、思わず口に出す。

顎に手を当て考えていた赤城は大体事態を把握できたらしく、手をパンつと一回叩いた。

指揮官を含めた6人は赤城に注目を寄せる

「5人はこのお菓子の名称で話し合ってたのね？」

元々調理室にいた5人は同時に頷く

赤城は話を続ける

「それに加えて指揮官様の知っている名称とも違うということですね」

「その通りだ」

それを聞き赤城は腕を組み少し悩ましげに続ける

「このお菓子について私が知ってる名前は今川焼きですわ。でも、大判焼き、回転焼きも聞いたことがあります。ですが、太鼓饅頭、御座候、おやきについては知りませんわ」

千代田、金剛、比叡は少し安堵するが、指揮官と比叡、加古は驚いている。赤城は話を続ける

「しかも、私が知ってるおやきは指揮官様の言ってるこのお菓子とは全然違うものですわ」

「え!?!」

指揮官は驚く

「私の知ってるおやきとも違いますわ」

「私もです」

「私も」

「おやきではないよね」

「ええ」

先程、揉めていた5人も赤城に同意する。

指揮官は困惑するしかなかった。

「私の同僚はコレをおやきと言っていたぞ？皆の知ってるおやきはどんなのなんだ？」

指揮官は自分の認識と異なる〈おやき〉の存在が気になり尋ねる

「中身はアンコもありますが、野沢菜が入っているのが有名ですわ。あと外の色合いも白くて、焼き目がついているものですわね」

赤城は形を思い出しながら話す。

指揮官はその〈おやき〉は知らなかった。

「野沢菜とかが入っているのか？それではおやつではなく、食事の一品みたいじゃないか」

「そのイメージでしたわ。まさか指揮官様が今川焼きのことをおやきとおっしゃるとは思ってなかったのよ」

赤城も頭を抱える。金剛はふと尋ねる。

「結局、このお菓子の名称は正式にはなんですか？」

そうだった、と全員思った。

元はこのお菓子の名前で揉めていたのだ。

全員が全員違う名前を上げたために結論には至ってない。

「お悩みのようですね」

全員が廊下の扉の方へ目を向ける。

そこには重桜の中でもかなり見識が深いことで知られる天城が立っていた。

「天城姉様……」

「あら、赤城もお手上げなんて余程なのね。どのような悩みかしら？」

「それは……」

赤城は天城に事の発端から説明をした。

天城は聞いたあと微笑みながら話し始めた。

「お菓子の名前の事で指揮官と赤城も一緒になって真剣に悩んでいたのね。私としてはとても嬉しいわ」

「このお菓子の名前については色々説があるの。その一つに重桜で昔、今川橋という所で売られていたことがきっかけで今川焼きという

名称が付いたという説があるわね」

「ちなみに、大判焼きは今川焼きよりも少し大きなものを作った際につけられた。回転焼きは生地を回転させて焼くからとも言われているわ。太鼓饅頭はその形が太鼓に似てるからつけられたとされるわ。」

ほーっと4人が感心していると加古は尋ねる

「では、御座候は？」

「それは今川焼きを作ってる会社名がそのお菓子の名前になったのよ」

「元は同じ名前だったのが変化したのですね」

「そのようね。そのお店の逸品が元の名前よりも有名になるパターンね。」

「では、おやきは？」

指揮官も気になって聞いてしまった

他の人たちのおやきと認識が違っただけあつて余計由来が気になったのだ

天城は悩むことなくすらすらと答え始めた

「おやきは重桜の蝦夷方面で呼ばれる今川焼の呼び方ですわ。どうしておやきと呼ばれるようになったのかは不明ですが。」

まさかの由来不明と言われて指揮官は驚いた。

「では、赤城達の言うおやきとは何だ？」

「それは重桜の信州地方で有名な料理ですわ。実際に存在もしますわ。蝦夷以外の場所ではおやきのことは信州の料理のことを指すことが多いですわ。」

全員驚いた。どちらのおやきも存在したことだ。

天城は全員を見ながらニコニコしている

「さて、悩みごとは解決したかしら？頭を使った分甘いものが丁度欲しくなってきたでしょうし、皆で食べましょ？時間も良い時間ですわ」

天城の登場により今川焼きの名称問題は一端の終結を迎えた。

なお、この後の指揮官を交えたおやつ時間で誰が指揮官の隣に座るかで一悶着あつたことはまた別の話である…